# 令和5年度 多摩市立豊ヶ丘小学校 学校評価書

| 学校教育目標 | |
|---|---|
| 人権尊重の精神を基盤として、調和の取れた人間性豊かな児童の育成<br>◎ 実行する子（知） ○ 思いやりのある子（徳） ○ 健康な子（体） | |
| 目指す学校像（学校経営ビジョン） | |
| 「2050年の大人づくり」<br>人権尊重を基盤に、地域・保護者及び関係諸機関と緊密に連携した「共に教育」（共育）を推進し、誰一人取り残さない社会の実現に向けて取り組むことができる大人を育成する学校 | |
| 目指す子供像 | 目指す教師像 |
| 未来に向けて自らの知恵を活用し、周りの人と協働して改革・革新ができ、自分の利益だけではなく、社会に対して貢献できる児童 | 児童一人一人としっかり向き合い、愛情を注ぐとともに、児童の輝くところに気付き、自己肯定感を高めさせることができる教師 |

## 1 自己評価結果と学校関係者評価の状況

### （1）確かな学力の育成

| 重点目標 | ・ユニバーサルデザインの視点に基づいた授業の実施、個別最適な学びと協働的な学びの保証による、各教科等における基礎的・基本的な学習内容の確実な定着<br>・プログラミング的思考の育成<br>・カリキュラムマネジメント（身に付けさせたい力を横断的・総合的に学ばせる）による、ESDで重視する能力・態度の育成 | | | |
|---|---|---|---|---|
| 評価項目<br>（目標とする成果・指標 %） | 自己評価 | | 学校関係者評価 | |
| | 評語 | 現状の分析と改善策 | 評語 | 学校運営連絡協議会委員の意見 |
| ・東京ベーシック・ドリルにおいて、全児童の8割が達成率90%になるようにする。 | 2 | 東京ベーシック・ドリル診断シートでの90%以上の達成率は44%であった。教員がファシリテーターとなり主体的・対話的で深い学びの取組を一層高める必要がある。 | A | 学校の自己評価は概ね妥当と考える。評価項目3つのESDで重視する能力・態度の育成は、3としているが、保護者の肯定的評価が89%であるので自己評価の評語は「4」でよいと考える。東京ベーシック・ドリルの診断シートで不十分だった領域を復習させるのが負担になっているとのことだが、何が有効か考え、保護者の理解も得ていくことが必要と思われる。 |
| ・一連の活動をより効率的に実現するための思考力を育成し、学力に関する保護者アンケートの肯定的評価を90%以上にする。 | 4 | 学力に関する保護者アンケートの肯定的評価の平均は90.3%であった。引き続き、メタ認知を育成し、問題解決的な学習過程を推進する。 | A | |
| ・カリキュラムマネジメントによって、ESDで重視する能力・態度を育成し、特色ある教育活動及び学力に関する保護者アンケートの肯定的評価を90%以上にする。 | 4 | カリキュラムマネジメントの実施による学力に関する保護者アンケートの肯定的評価の平均は89.0%であった。引き続き、批判的に考える力や未来を予想して計画を立てる力、多面的・総合的に考える力を育成する。 | A | |
| 評価のまとめ | 本年度の全国学力学習状況調査で、第6学年児童は全国平均ではほぼ同程度だが、東京都平均は5ポイント下回った。また、英検サポートプログラムでの結果は昨年度とほぼ同程度であった。自らの学習を調整し、主体的・対話的で深い学びを体現できる児童の育成のために、引き続き教職員の授業力を向上させ、ファシリテーターとしての資質・能力の向上を図る。また、引き続きプログラミング教育の実施、授業のユニバーサルデザイン化の推進を行う。 | | | |

【評語について】

| 自己評価 | | | 学校関係者評価 | |
|---|---|---|---|---|
| 評語 | 達成状況 | 成果指標 | 評語 | 自己評価の適切さ |
| 4 | 申し分なく達成した | 90%以上～100% | A | 適切である |
| 3 | おおむね達成した | 70%以上～90%未満 | B | おおむね適切である |
| 2 | やや下回った | 40%以上～70%未満 | C | 適切でない |
| 1 | 大きく下回った | 40%未満 | D | 評価は困難である |

### （2）豊かな心の育成

| 重点目標 | ・議論などの対話的な授業を推進する。自分の考えをもちながらも他の人の考えを大切にすることによる、思いやりの心や規範意識等の道徳的実践意欲の向上<br>・様々な体験的活動や集団活動を通して、より人間関係づくりができる児童の育成 | | | |
|---|---|---|---|---|
| 評価項目<br>（目標とする成果・指標 %） | 自己評価 | | 学校関係者評価 | |
| | 評語 | 現状の分析と改善策 | 評語 | 学校運営連絡協議会委員の意見 |
| ・いじめは起こり得るものとして、いじめの未然防止、早期発見、早期対応を心がけ、いじめの解消率を100%にする。 | 3 | 6月の「ふれあい月間」におけるいじめ報告件数は13件、11月の「ふれあい月間」での解消は11件であった。解消率は85%だったが、新たないじめ報告もあった。今後もいじめの未然防止に努めるとともに、早期発見、早期解決に努める。 | A | 学校の自己評価は妥当と考える。いじめ防止については傍観者をつくらないことが大切と考える。いじめといかないまでも、人権があるので難しいが、何が起きているのかを子どもたちにも伝えないと他人事になってしまう。人の心には差別等の意識はあるということから出発するようにしてほしい。そこからどうするかを考え、お互いに尊重する心を育む。<br>対話ができると豊かな心が育つ。対話できる場を多くできるとよい。児童館等も協力できるところはしていく。 |
| ・「特別の教科 道徳」において、物事を多面的に考えたり、議論したりして、自分の考えと友達の考えを比べたり取り入れたりして自己の生き方に対する考えを深めさせ、道徳的実践に関する保護者アンケートの肯定的評価を90%以上とする。 | 3 | 保護者アンケートによる「思いやりの心や規範意識の向上」「すすんで挨拶をすることができる」での肯定的評価は89.6%、88.6%であった。他者と関わることの喜びや挨拶の大切さを引き続き指導する。 | A | |
| ・様々な集団活動を通して、いつでもどこでも誰とでも仲良くできる資質を育成し、道徳的実践に関する保護者アンケートの肯定的評価を90%以上とする。 | 3 | 保護者アンケートによる道徳的な実践に関する評価の平均は89.3%であった。今後もたてわり班活動や合同授業等を実施し、つながりを尊重する態度を育成する。 | A | |
| 評価のまとめ | いじめの未解決の案件は、対象の児童が確定できなかった2件であった。また、11月の「ふれあい月間」では新たないじめ案件も報告されている。いじめは、起こり得ることを前提として、いじめの解消に全力を尽くすことはもちろんのこと、児童の変化を見逃さず全教職員でいじめの未然防止、早期発見に引き続き取り組んでいく。 | | | |

### （3）健やかな体の育成

| 重点目標 | ・生涯に渡り、心身ともに健康な児童の育成と豊かなスポーツライフの実現を目指し、運動に親しむ児童の育成<br>・自分の身は自分で守る危機回避意識と交通安全に関する取組や避難訓練等を通した児童自身による危機回避能力の向上<br>・食に対する意識の涵養 | | | |
|---|---|---|---|---|
| 評価項目<br>（目標とする成果・指標 %） | 自己評価 | | 学校関係者評価 | |
| | 評語 | 現状の分析と改善策 | 評語 | 学校運営連絡協議会委員の意見 |
| ・「豊ヶ丘小レガシー」として、一校一取組や「トヨリンピック」等により、体力・運動能力調査において都の平均以上にする。 | 1 | 学年別男女別での体力・運動能力調査で、国・都の平均を上回ったのは39.6%であった。昨年の34%から5.6%上昇した。引き続き「トヨリンピック」や集団遊び等で運動に親しむ機会を提供していく。 | A | 学校の自己評価は妥当と考える。体力・運動能力調査で、国・都の平均を上回った項目が5.6%上昇したのは成果が出ていると思われる。低学年の児童の残菜率がよくないとの説明だが、保育園では見て慣れるから始めている。また、感覚過敏のお子さんは偏食の傾向が強いとのことである。まずは、楽しい食の時間を心がけてほしい。引き続き、体力の向上、命を大切にする教育、食に関する取り組みを続けてほしい。 |
| ・避難訓練や安全指導による児童の危機回避能力育成を通して、安全に関する保護者アンケートでの肯定的評価を90%以上とする。 | 4 | 安全に関わる保護者アンケートの肯定的評価の平均は93.5%であった。 | A | |
| ・給食指導、栽培・収穫などの体験活動を通して、食に対する意識を高め、健康に関する保護者アンケートでの肯定的評価を90%以上とする。 | 4 | 健康に関する保護者アンケートの肯定的評価の平均は92.3%であった。しかし、多摩市の残菜調査は悪化していた。食への関心を高める必要がある。 | A | |
| 評価のまとめ | 体育の授業の改善や一校一取組、「トヨリンピック」等で運動に親しむ児童の育成を目指している。結果として体力の向上が見られ始めた。引き続き運動に親しむ場や機会を提供しつつ、日常的に運動に親しむ児童の育成を続けていく。一方、食に関しては、低学年で残菜が多い。自己の健康のために食に関する関心を高めていく。 | | | |

（4）家庭や地域との連携

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 重点目標 | ・コミュニティ・スクールの強みを生かし、保護者及び地域の教育力を積極的に活用した「共に教育」の推進<br>・学校だより、学年や学級だより、学校ホームページ等の情報発信やICTの活用による授業の開発による学校理解度の向上 | | | |
| 評価項目 | 自己評価 | | 学校関係者評価 | |
| | 評語 | 現状の分析と改善策 | 評語 | 学校運営連絡協議会委員の意見 |
| ・12月実施予定の保護者アンケートによる「共に教育」に関する評価において90%以上とする。 | 3 | 「共に教育」に関する保護者アンケートの肯定的評価の平均は、89.7%であった。協働して教育活動を行っている状況を広く保護者に周知していく。 | A | 学校の自己評価は妥当と考える。保護者やPTA、学校運営協議会等と一緒に教育活動を行っていることは伝えていると考える。紙での情報ではなく、データでの情報のため、読み飛ばす保護者もいるように感じるとのことなので、伝え方の工夫は必要である。また、学校運営協議委員等に協力してほしいことを伝えてほしい。口伝えで伝えることもできる。 |
| ・12月実施予定の保護者アンケートによる「情報発信」に関する評価において90%以上とする。 | 3 | 情報発信に関する保護者アンケートの肯定的評価は86.1%であった。情報発信の在り方について検討し、発信方法の工夫を図る。 | A | |
| | | | | |
| 評価のまとめ | 共に教育、情報発信において、昨年度は両項目とも90%以上の肯定的評価をいただいた。しかし、今年度は肯定的な評価の割合が低下している。情報発信の手立てをデジタルにしたことで保護者にとってじっくり目を通すことが少なくなったことが考えられる。デジタルでの情報発信の工夫とともに、保護者や地域の方に授業や行事に一層の参加や参画もしていただける取り組みを図っていく。 | | | |

2 次年度に向けた学校経営の方向性、課題等

《方向性》
「2050年の大人づくり」に向け、「依存から自律へ」「知識から知恵へ」「IQ から EQ へ」を念頭に未来に向けて自らの知恵を活用し、周りの人と協働して改革・革新ができ、自分の利益だけではなく、社会に対して貢献できる人材の育成を一層推進する。そのための取組として、授業のユニバーサルデザイン化（視覚化、焦点化、共有化から）のための授業改善、校内研究による指導方法の研修を行う。さらに、児童自らが学習過程を計画し、実行するために教員のファシリテーターとしての資質・能力の向上を図ることによる主体的・対話的で深い学びのさらなる推進を実施する。また、学校いじめ対策委員会と不登校対策委員会（仮称）の毎月の実施、特別支援教育校内委員会の毎月の実施、「ふれあい月間」、セーフティ教室の実施、月1回、「いじめ防止の日」を設定、体育的行事や一校一取組み、「トヨリンピック」等の体育的活動の充実及び定期的な取り組み、ICT機器の活用、地域人材の活用を行い、学校教育目標（実行する子　思いやりのある子　健康な子）の具現化に取り組む。
《課題》
2050年の大人づくりに向け、自らの知恵を活用し、周りの人と協働して改革・革新ができ、自分の利益だけではなく、社会に対して貢献できる人材の育成を目指す。そのために、小学校卒業時の目指すべき児童像を保護者や地域の方と共有し、本校の教育方針や授業、行事の在り方や方向性等を適宜、点検、改善を行うことが必要である。また、点検、改善を行うために、保護者や地域の方の行事や授業への参観だけでなく、参加や参画の仕組みを構築していくことが重要となる。

以上のとおり報告いたします。

令和6年3月1日
多摩市立豊ヶ丘小 校長　　ト 部 敦 彦　　公印

# 令和5年度　学校評価書

# 多摩市立豊ヶ丘小学校